



1997年7月、私は延川県の向かい側の山にある南塬村に行きました。写真を撮りたい、でも、あまり疲れたくはない、それでも黄土高原の雄大な風景を何とか撮影したいというときはやっぱり南塬村に行くことになるでしょう。その頃、製作された「人生」という映画の、黄土高原での撮影は南塬村で行われたということでもあります。しかし、風景を写したいと思っても、カメラやレンズは専門家のものではないし、経験も足りないので気持ちに力が伴いません。人物や家庭で使用される道具、家畜などを写して絵を描く時の助けになればという気持ちです。

村の中を行き当たりばったりに歩き回っているうち、陕北の人々が圪崂（溝の流れが方向を変えるところ）と呼んでいるところに来ていました。圪崂から話し声が聞こえるので、前に進んで見下ろしますと、黄土のがけ下に家が一戸はめ込まれ、入り口のところで三人の子どもが何かをしています。何をしているのか分からないまま、とりあえず写真を一枚写しました。

途中立ち寄った現地の人のお話では、このあたりの子供達は夏休みが来ると谷の奥で薬草掘りをするとのこと。‘羊脑梢’^{yáng nǎo shāo}と呼ばれるある種の薬草は、町の人に‘五加皮’^{wū jiā pí}と呼ばれ、乾燥させたものは500gあたり7、8円で県の薬屋が買い取るのだそうです。三人の子どもたちが一日かけて掘り出した薬草を押しつぶして乾燥させれば200gあまりになり、3元ほどで売れるというわけです。つまり子供達はそういうことをしていたのです。

写真をプリントしてみて、最も私の気持ちを惹いたのは立ったまま薬草を押しつぶしている、学齢前



と思しき髪の短い女の子でした。しかし、二年目、再び此処に来て見ますと、家族はどこに行ったか分かりません。村の人の話では、町に引っ越したけれどどこに住んでいるか分からないとのこと。仕方なく、三枚の写真（私はいつも人数分の写真を贈ることにしているので）と、3本のシャープペンを入り口の隙間から押し込んで立ち去りました。

2001年8月のある日、南塬村に行く途中、私はとうとう4年前、窑洞の入り口の前で薬草を始末していた三兄妹に出会いました。しかも西安の医学専門学校で学んでいるという彼らのお姉さんも一緒でした。四人の子どもたちはそれぞれとても可愛らしく物分りのよい子ども達で、夏休みというのに外に出て遊びもせず勉強の復習をしていました。ちょうどいい機会なので私は彼ら全員と一緒に撮影してあげました。

子供達は、三枚の写真とシャープペンを戸の隙間から押し込んでくれた人がいたことを覚えていて、それが私だということでびっくりしている様子でした。しかし、残念な事に、《陕北女娃》に加えようと思っている、一番小さな、巧琴という女の子は、新学期には四年生になるはずでしたが自分から学校に行くのを止めてしまっていました。

彼女が言うには、二つの理由があって、一つは家が貧しくて学費を用意できないということ、二つ目は自分も勉強したいと思わないからとのこと。

私が南塬村を回るとき、一緒についてくる彼女に勉強を続けるよう励まし、学費が問題なら、誰か手伝ってくれる友達を探そうとできるし、一学期に300元もいらなんでしょう？とさえいいました。彼女は黙ったままでした。しかし、アンケートの中には「大きくなったら学校の先生になりたい」と明らかに矛盾したことが書かれています。子供達は皆知っているのです。西安で医学専門学校のお姉さんの一年間の学費は6,000元余りで、これは4年間で



に矛盾したことが書かれています。子供達は皆知っているのです。西安で医学専門学校のお姉さんの一年間の学費は6,000元余りで、これは4年間で30,000元近くなり、黄土高原で生活する家庭にとって正に天文学的数字だということ。父親は出稼ぎに出るしかなく、母親は町でパートととして働いています。昼には家に戻らず、カマドには何個かの干からびた馍馍（何も入っていない饅頭）が置いてあります。きっと彼女達兄弟の昼ごはんなのではないでしょうか？

その後、南塬村に行く度に巧琴の家に寄り、ある時は、勉強を続けたいなら、すぐにもお金を集めるといふ、友人からの手紙さえ携えて行きました。しかし結局はこの女の子の気持ちを変えることはできませんでした。女の子を見ていると、朝から晩まで、水を汲んだり食事を作ったりで、確かにこの手の仕事をする人がこの家に必要なのだと感じます。父親は出稼ぎで、母親は町で雑用、姉たちや兄は学校で、家には他に誰もいないのですから誰かが家事をする必要があるでしょう？毎回、此処を通ると、巧琴は私を屋内に招い

て飲み物を用意し、ある時は喉が渴いたら食べるようにと何個かの林檎を渡してくれたりしました。

ある夕方、町に帰るので、急ぎ足で下山していると巧琴が桶に半分ほど水を入れて坂の下からよろよろしながらゆっくりと山の方へ登ってきました。私が山を登ると、息はぜーぜーするし、顔中大汗になるし、両足は疲れで力が抜けるし、という有様なのに、まして大人にもなりきれない女の子が水を担いで山道に行くのはどんなにか大変なことでしょう！日は暮れかかり写真に撮るすべはありません。私はずっとこのことが忘れられずにいましたが、それでも、昼間に山で出会っても、水運びの写真撮るからといって巧琴にもう一度担いでとはとても言い出せることはありません…。

巧琴は真面目ないい子で、お姉さんやお兄さんの勉学のため、家庭の負担を軽減するため自分を犠牲にしているのです。私は巧琴のお姉さんやお兄さんもきっと心の中でこの可愛い優しい妹を気に掛けているに違いないと信じています。

